



鳥越敦司 atushi torigoe



核爆弾

二〇一〇年。この日も地球の空は青かった。
が……

「大変です首相。アメリカの核爆弾が飛んで来ました！」

「何だっ！ それで防げたのだろうな。」

「はい、何とか太平洋上で爆発しましたが……」

これは大変な騒ぎとなった。
アメリカは本年度からロボットを使って軍の指揮にあたらせていたのだ。

右の事件につきアメリカは、もちろん公式に謝罪した。
だが次の日、
中国とパキスタンが核兵器を飛ばし合った。

先制したのは中国だったのだ。これについて世界中から非難
があがったが、中国軍首脳は、

「われわれは軍の指揮を優秀なアメリカのロボットに任せている。文句があるならアメリカへ言ってくれ。」

と声明した。
世界中でロボットが活躍するようになって久しい。

アメリカは、もとよりわが日本でもレストランなどは大抵ロボットだし、今年からプロ野球選手も一人ロボットが現れた
のだ。

その結果は、……ロボットはオールスターに出場したのだった。
All-Star アメリカの国防省だってロボットが大分いるといわれている。

もちろん先の戦争は国連問題となったのだが、国連の職員もみんなロボットなのだ。

ロボットは給料もいらないし、故障すると他のロボットが修理することになっている。

開発はアメリカでされたが、車と同様わが国でも近年はロボットの開発は目ざましい。

ある会社では重役をロボットにしたとか、パチンコ屋の従業員は、みなロボットだし、サラ金の取立てもロボットがするそだ。

Pachinkoya

もちろん生産者は増えたが、大部分の人は余暇を楽しめるようになった。

それは喜ばしい事だったのだが・・・。

そうそう、国連の問題を話さなければならない。

結局国連では、中国の軍事ロボットのスイッチを切れという事になった。

しかし。このロボットのスイッチは簡単には切れないのだ。

しかもリーダーのロボットを他の多数のロボットが守っている。

これらのロボットをこわすには相当な国家予算をふいにする事になる。

中国には、それは出来なかった。

中国は国連を脱退した。

パキスタンは国家の予算の関係でロボットは軍には置いてなかった。

この戦争の結果は？ 世界中が注目した。

結果は中国の圧倒的勝利に終わったのだ。

パキスタンは降服した。 それでも

戦争が終わると中国はパキスタンを占領せずに国連へ復帰したけれど。

だが、パキスタンの都市は惨澹たるもの。 Santander 中国もかなりの打撃を受けている。 核の雲はあちこちで上がった。 この事は世界的問題となったが、アメリカの大統領は、

「核の雲を無くす爆弾を発明した。」 と発表した。

そして、太平洋上で核を爆発。 そのすぐ後にその爆弾を爆発させ、言葉通り、核の雲を消したのだ。

この新兵器は世界中が買い求めた。 そして、ついに世界的な核戦争が始まったのだ。

全面的核戦争になつてしまっていたのは核の雲だった。

しかし、これで、その恐れはなくなったのだから

だが、核の雲を無くす爆弾は輸出されたものは効果のないものばかりだったのだ。

それで、世界の大都市のほとんどは壊滅した。 ホワイトハウスでは大統領が得意気に話している、

「どうだね、わたしの立てた作戦は？」

「上々ですよ。」 と副大統領が言った。

「これで、あとは日本とスイス位だね。」

大統領は、世界中の映像を見ながら話す。 「それも時間の問題ですよ。スイスは、ともかく、日本なんてどうにでもなるんですから。」 Nante

と国防長官が発言した。

「それより、」

と副大統領は発言する。 「日本のやっつらも、大統領が、まさか宇宙人だなんて思ってもないでしょうねえ。」 'em Une Nante.

「ああ、彼らの頭には輸出しかないからなあ。」

と大統領は答えて、笑った。 「しかし、わたしを受け入れた君達は賢明だったよ。」

「そうですとも、われわれは、もう日本には勝てないと思っていたのですから。」

悔しそうに、副大統領は述べた。 「まあ、日本が、いくらがんばろうと我々の星の文明には、とても及ばんよ。現に...」 Oyooan'yo

と、話して大統領はニヤリと笑った。 「あの中国の軍事ロボットも、ここホワイトハウスで操作していたのと同じ、核の雲を消す爆弾も我々の星のものさ。」

「大統領、世界はやはり我々アメリカのものですな。」

と発言してCIA長官が立ち上がった。

「そうだと。乾杯しよう。」

と述べると大統領はグラスを取った。 「日本に核戦争を仕掛ける日に。」

「乾杯！」”■■■■■!”
アメリカ合衆国首脳一同はグラスを合わせた。

無口な日本の首脳
時の首相は大変な無口で知られた人だった。
長い文章は喋れないらしい。

「首相、大変です。今度は本当の核が・・・。」”■■■■■”
首相官邸にいた、わたしに、防衛大臣が電話してきた。
「すぐ避難を！」”■■■■■!”

その後の電話の声を聞き、前に、わたしは地下の核シェルターへ逃げた。
十分後、日本の首脳は皆、核シェルターに集まった。

「首相、どうします？」”■■■■■?”
日本の首脳一同は、異口同音で聞いた。
「そうだな。われわれだけが生き延びればいいのか。とても勝ち目はないよ。」”■■■■■”
Ikinobire.
と、わたしは答えた。
「そんな・・・。」”■■■■■”
首脳一同が、そう嘆くのを、わたしは上の空で聞いていた。
から・・・。



<http://p.booklog.jp/book/106359>

著者：鳥越敦司 atushi torigoe

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dontanine/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106359>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106359>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ